

# 千葉県建築文化賞

## 第22回表彰作品集



2015年

主催：千葉県 共催：一般社団法人 千葉県建築士会

# 千葉県建築文化賞について



千葉県知事 森田 健作

第22回千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募をいただき、誠にありがとうございました。

千葉県建築文化賞は、建築文化や居住環境に対する県民の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的に平成6年度に創設されました。

今年度は、54点の応募をいただき、千葉県建築文化賞検討会議による検討内容を踏まえ、最優秀賞2点、優秀賞4点及び入賞2点の合計8点を選定しました。

受賞作品は、安全や快適性、景観、環境に配慮するなど、本県の建築文化の向上につながるものであり、千葉の魅力を高め、地域の活性化にも貢献する素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、地域社会の中で親しまれ、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

さて、今年度は、総合計画「新 輝け!ちば元気プラン」実施計画の総仕上げの年です。千葉の未来を担う子どもたちや孫たちのために、首都圏、そして日本をリードする「日本一の光り輝く千葉県」の実現に向けて、全力で取り組んでまいりますので、引き続き皆様の御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、受賞者並びに応募いただいた皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさつといたします。

平成28年3月

## 目次

千葉県建築文化賞について	1	ちはら台の家	8
第22回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	はくすい保育園	9
京葉銀行千葉みなと本部	3	八千代市立中央図書館・八千代市市民ギャラリー	9
鴨川の家	4	千葉県建築文化賞の実績	10
勝浦市芸術文化交流センター（キュステ）	5	(応募点数・受賞作品数) 一覧	
The University DINING	6	受賞作品の位置	10
流山市立おおたかの森小・中学校	7	選考の基準	
流山市おおたかの森センター			
流山市立おおたかの森こども図書館			

# 第22回千葉県建築文化賞選考経過と総評

## 応募54点から8点授賞(選考経過と総評)

### (選考経過)

千葉県建築文化賞検討会議委員長 北原 理雄

第22回千葉県建築文化賞は平成27年6月の検討会議で募集要領を定め、7月上旬から9月下旬まで応募を受け付け、総数54点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

第1次選考はすべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真をもとに投票を行い、一般建築物7点、住宅5点を選んだ。次いで11月の3日間をかけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。第2次選考は12月開催の検討会議で、現地調査の報告を踏まえて再度投票を行い、討議を重ねながら優秀な建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある建築物が応募している場合は、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞2点、優秀賞4点、入賞2点を表彰候補作品として決定した。

賞の区分を「最優秀賞」「優秀賞」「入賞」の3区分に改めてから本年度で2回目だが、今回は比較的規模が大きなもの、完成度の高いものが多かった。それが最優秀賞、優秀賞の点数が増えた一因である。現地調査の対象のうち、惜しくも授賞を逃した作品にも、今後の展開に期待できる可能性が見られた。

募集部門	選考過程	応募点数	現地調査 (第1次選考)	受賞作品選定(第2次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		33	7	1	3	2
住宅		21	5	1	1	0
合計		54	12	2	4	2

### (総評)

#### 一般建築物の部

一般建築物の部への応募は33点で、学校関連施設、公共施設に佳作が多かったが、それ以外に店舗、事務所、こども園など、今回も多彩な作品が寄せられた。

最優秀賞の「京葉銀行千葉みなと本部」は、港に通じる大通りに面して建設された新しい本部ビルであり、深い庇によって水平性を強調した端正なファサードが美しい。ディテールまで配慮が行き届いていると同時に、チャレンジ精神を感じることができる高質なデザインである。地域に開かれた街角広場やアート展示のショーケース、環境負荷低減や防災への取り組みなども高く評価された。

優秀賞の「勝浦市芸術文化交流センター(キュステ)」は、太平洋を望む高台に建つ多目的ホールと公民館機能の複合施設である。1階ガラス面の上にオーバーハングした2階が載り、煉瓦ルーバーのリズミカルな陰翳と合わせ、印象的なファサードを生みだしている。外部広場に開放可能な多目的ホール、第2のホールとして利用可能なホワイエなど、市民の多様なニーズに応え、稼働率も高いという。

「The University DINING」は、キャンパスを貫く並木道に面した平屋の学生食堂であり、深い庇の下に3面がガラス張りの明るいファサードを見せている。内部は見通しのよい大空間でありながら、天井高を抑え、居心地のよいスペースとなっている。ゼミやレセプションにも使われる大学の新しい中心であると同時に、地域に開かれた交流の場を提供している。

「流山市立おおたかの森小・中学校 流山市立おおたかの森センター 流山市立おおたかの森こども図書館」は、小・中学校併設校、地域交流センター、こども図書館、児童保育所の複合施設である。隣接する森につながる「風のみち」を軸に、性格の異なる施設をグルーピングすることによって、空間的にもプログラムのにも複雑な大規模複合施設をうまくまとめている。

入賞の「はくすい保育園」は、南に緩やかに傾斜した敷地を活かして、階段状に保育室を配置し、自然環境との交流を意識した明るく開放的な育みの場を生みだしている。「八千代市立中央図書館・八千代市市民ギャラリー」は、天空光をうまく取り入れ、子ども、高齢者、障害者も安心して使える明るく快適な空間を実現している。

#### 住宅の部

住宅の部の応募は21点であり、都市部だけでなく農村部や海岸部からも地域性を活かした個性的な作品が寄せられた。

最優秀賞の「鴨川の家」は、南房総の国定公園内、海を遠望する緩やかな傾斜地に配された母屋と離れからなる。高齢のご夫婦の“終の棲家”として計画され、介護の仕事に携わるご子息の意見を取り入れながら、介護される側、介護する側、それをサポートする側の三者の要求に応える配慮が行き届いたプランを実現している。水田に面した南側は、大きなガラスの開口から広いテラスにつながり、自然の恵みを楽しむと同時に、緑豊かな環境と調和する景観を生みだしている。

優秀賞の「ちはら台の家」は、築19年を経た大手ハウスメーカーの軽量鉄骨造住宅をリノベーションしたものである。構造と外観をほぼ維持しながら、断熱性の低さ、間取りの使いづらさ、収納の不足を解決するため、内部に大胆に手を入れ、居心地がよく使いやすい住まいへと再生している点が評価された。今後、類似条件の住宅リノベーションに応用可能なモデルとしても期待できる。

## 最優秀賞

一般建築物の部

建築主：株式会社京葉銀行  
設計：株式会社日建設  
施工：株式会社竹中工務店 東関東支店  
所在地：千葉市中央区千葉港5-4-5

時を超えて持続しうる、地域に開いた建築文化の姿

# 京葉銀行千葉みなと本部



信頼感と親しみやすさを併せ持つ地域に根差した銀行に相応しい新しい顔を創出

(撮影/(株)エスエス 島尾 望)

いわゆる「地銀」の本店が地域に開く、それが美しく顕在化された出色の建築作品である。頻発しうる自然災害に対して経済を支える企業として備えること、そして顧客のみならず立地する地域に貢献することは、近年BCP（業務継続計画）として広く普及してきた。しかし、それが美と技を伴う「建築文化」に昇華された例はまだ少ない。「ワークプレイス」であるオフィスビルの一義的な機能に関して、これまで膨大に蓄積してきた組織設計事務所の実力が遺憾なく発揮され、単なる新規性を狙った技術の羅列ではない「インテグレーション」とも言うべき域に達している。しかも、それが事務棟・設備棟ともに深い庇の重層が陰翳を生み出す彫りの深いファサードの構成を生んだ。そして、平滑なガラス面で覆われたカーテンウォールの既視感を凌駕して、構造と意匠が一体化され凛としたたたずまいを見せている。

計画・設計・建設の過程では、建て主と設計者間で十分なやり

とりがあったに違いない。元来、銀行として「周囲に開く」ことは容易なことではない。「セキュリティ」と「地域貢献」という、相反しがちな目的に「BCP」の課題も加わり、それらをデザインという統合化の作業を通して様々な試行錯誤があったはずである。例えば免震構造が事務棟で基礎免震、設備棟で柱頭免震に切り替わるなど、津波対策を含めて複雑な構成となっているが、その解がPC版を多用した美しい施工技術とともに、大変精緻な仕上がりを見せていることも特筆すべきである。以上から審査員の総意として最優秀賞が授与された。

(岩村 和夫)



建築空間と融合するアートワークを設けた開放的なエントランスホール

(撮影/(株)エスエス 島尾 望)



交差点に面して設けた地域の方々との交流の場「コミュニティガーデン」

(撮影/(株)エスエス 島尾 望)

建築主：A氏  
 設計：吉野弘建築設計事務所  
 施工：株式会社ケイティエス  
 所在地：鴨川市

〈介護〉が生んだ住宅建築の創造性

## 鴨川の家



アプローチから見る外観 海を望む自然豊かな傾斜地に計画され、母屋と離れの2棟からなる

夫を妻が介護する高齢夫婦のための平屋の家と2階建ての離れの2棟からなる住宅である。離れには現在、訪問介護の仕事をしている息子が一人で住んでいる。介護現場をよく知る息子と設計者の幸せな共創の結晶である。

介護の利便性を高めようとすると、廊下幅や手すりの位置など、デザインの制約要件が増えるとはしばしば思われている。しかし、この家では、介護からくる要請がデザインを引き出している。例えば、寝室にトイレ・浴室が斜めに取り付いている。このほうが、車椅子の方向転換がコンパクトでスムーズだからである。症状が進むにしたがって、寝室で過ごす時間が長くなるのを見越して、朝日の感じられる南東に面する寝室となっている。田んぼの四季が寝室からもリビングからも手に取るようにわかる。介護を必要とする人の状態によって、手すりが必要な位置も変わっていく。いずれは夫婦同室がしんどくなる。想定外の事態にも適応して、変わり続けられる家が、究極のバリアフリーということか。

母屋で水平の動きある空間が介護の必然から生まれているのに対して、2階建ての小さな離れはずっと延びた階段が垂直方向の空間を意識させる好対照をなしている。

外壁には、恣意性を超えたランダムな表情がゆっくり風

化していくことへのこだわりが強い。穏やかに古い、風格を増してエンディングを迎えたいという祈りが、終の棲家の板張りに表象されているかのようだ。

高齢化社会の重苦しさを免れない今、私たちは不確かな未来までも包み込んでくれる安心感を希求しているのではないか——鴨川の家を訪れて気づかされた。

(岡部 明子)



母屋 居間  
 前面の水田に対して開き、テラスが外部と内部を緩やかに繋ぐ



母屋 サニタリー  
 介護士の意見を聞きながら、変化に柔軟に対応するようプランニングにしている

## 優秀賞

一般建築物の部

建築主：勝浦市

設計：株式会社山下設計

施工：前田建設工業株式会社 東京建築支店

所在地：勝浦市沢倉5 2 3 - 1

勝浦の文化を発信するホール

# 勝浦市芸術文化交流センター(キュステ)



煉瓦ルーバーとピロティがブラインドレスな活動環境を創出

(撮影/株エスエス 東京支店)

この建物は、800席の多目的ホールと公民館機能の複合施設である。津波の影響の受けない、市役所のある高台に、海・光・緑といった勝浦の自然資源と、より多くの接点を持つ場所に施設は建設された。施設構成は、1階に外部広場に向け大きく開放可能な可変機構を持つホールを配置し、2階レベルでは、そのホールやホワイエを、ループ状の公民館機能を取り囲み、ホールと公民館機能の同時利用や、ホールと外部空間の連続利用に配慮した構成となっている。このループ状スペースは、1階ガラス面より外側にオーバーハングした形状となっているため、大きな庇としての役割を果たしている。さらに2階の活動スパー

スを取り囲むテラスの周囲に煉瓦ルーバーを配置することで日射制御を行い、開放的な活動環境を創り出している。地域の自然資源と応答する魅力的な活動の場を作り上げることでまとまった面積を確保し、2階の公民館機能と一体に利用できるホールとなっている。ホワイエ空間、リングギャラリー、音楽ホール・イベントホール・800席ホール・300席ホールなど様々な市民ニーズを受け止めることができる施設デザインを実現し、芸術文化と市民の物理的・日常的な距離を短縮したいと計画され、地域環境を享受できる「美しい光に包まれた広場のようなホール」となっている文化交流施設である。

(圓崎 直之)



音楽ホールとイベントホールに対応する多目的ホール

(撮影/奥村 浩司(フォワードストローク))



開放的な「第2のホール」として利用されるホワイエ

(撮影/奥村 浩司(フォワードストローク))

建築主：学校法人千葉学園 千葉商科大学  
 設計：工藤 和美+堀場 弘/シーラカンズK&H  
 施工：株式会社竹中工務店 東関東支店  
 所在地：市川市国府台1-3-1

～ゆらぎ～木漏れ日の下で集う

## The University DINING



2段の木梁が作り出す心地良いワンルーム空間

(撮影/浅川 敏)

『The University DINING』は千葉商科大学キャンパスのメインストリートに位置する。隣接する建物地下にあった旧学食のリニューアル構想を発端として計画された。建物は平屋で3方向を透明ガラスで囲み、大きな木屋根をかけている。メインストリートから1m程度上がった位置にあるため、遠目にも中の活動の様子が感じられる空間となっている。

建物に入っても屋内という感覚はなく、天井の梁間からの柔らかい光と外まで広がる視線。少し先の梁が連続して目に入る躍動感がある。絶妙な天井高が居心地良い。リビングを意識したという。

建物構成はシンプルかつ明快である。努力の結晶は木屋根の構造にある。繊細なLVL材を敷き並べ、上下2段鏡面反転に重ねた格子状の版。それを細い鉄骨丸柱で支えている。梁の配列は1/fゆらぎのリズムを用い、プログラム化して、構造解析と共に決定したという。31m×30mの木屋根で同じ配列となることはない。梁ピッチを波のよ

うに振幅させることで柔らかな『木漏れ日のような光』を実現した。

その他、学食プロジェクトとしてプロデュース会社+専門クリエイティブメンバーも加わり、運営やインテリア、グラフィックデザインまで質の高いものに仕上がっている。フロアスタッフには学生も参加している。

大学に新しい息吹を吹込んだのは間違いない。学生・教職員のキャンパスライフを充実したものにし、食事だけでなく、授業の合間・放課後も集える活動拠点のひとつとなった。一般の方、高校生も訪れるスポットにもなった。大学の教育活動の広がりを予感させる空間となった。(藤本 香)



キャンパスに灯りをともす夕景

(撮影/浅川 敏)



地域の人たちも立ち寄り、ダイニングの軒先

(撮影/浅川 敏)

## 優秀賞

一般建築物の部

地域に開かれた複合的學校建築としてのチャレンジ

### 流山市立おおたかの森小・中学校

### 流山市おおたかの森センター

### 流山市立おおたかの森こども図書館

建築主：流山市

設計：株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ

施工：株式会社大林組

所在地：流山市市野谷6 2 1 - 1



図書館正面 地域住民が利用可能な「こども図書館」と学校の図書館が並ぶ

(撮影/吉田 誠)

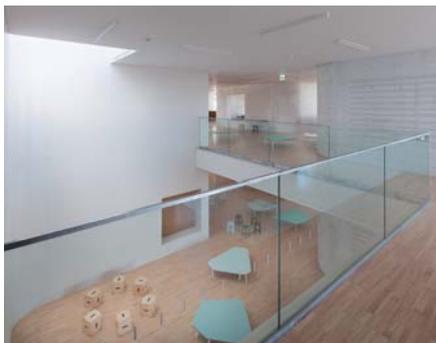
本作品は市立の小中学校と、地域交流センター、こども図書館、そして学童保育所が統合的に計画された、約22,000㎡におよぶ複合施設である。交通インフラの整備に伴い人口が増加している地域の特殊事情と、集約的な公共施設整備が時代のニーズとしての背景である。その事業化にあたってプロポーザルで選定された設計者は、県内で先駆けとなった「オープンスクール」のパイオニアだが、この規模のものは初めてである。

しかも、市街地と「おおたかの森」に挟まれた3mの高低差のある立地条件にあって、新たな解法の発見が求められた。ここに見られる道路側3階建て、グランド側2階建てとし、その中央を開放的な大階段の「風の道」が貫き、森と街を象徴的に繋ぐという構成がその答えであった。しかも、建物はそれぞれ中庭的空間を内包し、様々な中間領域とともに、豊かな内外空間を作り出している。多用された大型のアルミ製折り戸は、おおらかな開

放的室内空間を動線に沿って至るところに作り出している。

さらに、計画・設計上特筆すべきは、これほど大規模で複雑な構成の学校建築を、極端に言えば「フラットスラブ」と「L字壁」という2つの要素に還元し、そのフレキシビリティの上で自由自在に必要な要求に込込していることである。小学校はオープンスクール、中学校は大型建具によって閉じられる教室とオープンスペースとの複合という異なるシステムにも巧みに対応できるシステムとして設計されている。丸いコーナーはその反復に柔らかな表情を与え、室内空間に統一感と多様性を両立させている。

(岩村 和夫)



2層吹抜けのワークスペース  
上下階の視線をつなぐ

(撮影/吉田 誠)



第一体育館より森ののびを見る  
折戸を間口いっぱい開けることで風が抜ける

(撮影/吉田 誠)

優秀賞

住宅の部

建築主：柳 光彦・柳 幸子  
設計：野口修アーキテクトアトリエ  
施工：株式会社中野工務店  
所在地：市原市ちはら台

部屋を家に開く、家をまちに開く

## ちはら台の家



リビング入口を見る

(撮影/垂見写真事務所)

築19年、軽量鉄骨造の建売住宅のリノベーションである。125㎡の戸建て住宅は、夫婦二人にとっては広い。改修前は、部屋から一度出て、廊下や階段を通りトイレや浴室に行くのがともかく寒かったという。断熱性能の向上に加えて、居室を廊下や階段に開いて一体化したことにより、温熱環境の満足度がぐんと高まった。設計者が得意とする木の風合いを活かしたリビングがお気に入りだ。一般に20年ほどすると家族構成や経済状況が変わり、家に手を入れてみたいと思うものだ。だが、分譲住宅のリノベーション自由度は低い。この家の場合も、まずはハウスメーカー

並んでいる典型的な郊外住宅地にある。今回の改修にあたって、玄関脇の一室を治療室とした。ご主人が鍼灸師で以前は訪問で行っていたが、今では自宅に招き入れて施療している。リビングにもいろんな人が訪れるようになった。将来的には2階の一室を治療に訪れた人たちに開放することも考えているそうだ。成熟した郊外住宅地に、こうした小さなコミュニティビジネスが生まれてきている。内向的なマイホーム空間が均質に並ぶ郊外から、家をまちに開く郊外へ、一軒の家の創造的なリノベーションに変化の胎動を感じた。

(岡部 明子)

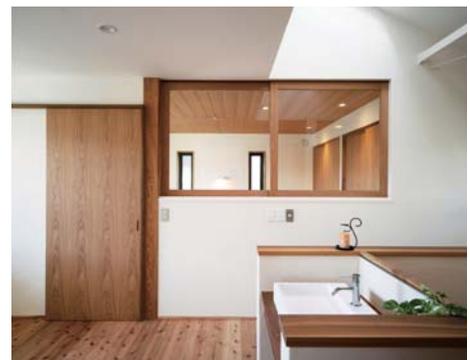
に問い合わせたが間取りの改変は無理だと言われたという。これが先例となって、戦後ベッドタウンとして発展した地域の広がる千葉県で、できないと諦められていた改修が広がることを期待したい。建替えは生活のリセットだが、改修はアップグレードである。

この家は、意匠も大きさも、大同小異の戸建て住宅が行儀よく



リビングからキッチンを見る

(撮影/垂見写真事務所)



2階ホール

(撮影/垂見写真事務所)

## 入賞

一般建築物の部

風や雨と遊ぶ・みんなの「大きな家」

# はくすい保育園

佐倉市の定員60名の保育園。同じ法人が運営する特別養護老人ホームの隣接地に、南北に高低差約5mの傾斜地という制約ある敷地条件を、むしろ「恵まれた環境」ととらえ、その特性を最大限に生かして計画された保育園である。

保育室をすべて1階扱いにすることで内装制限(準耐火)を逃れ、内部を木質仕上げとしている。構造は在来工法の軸組木造。斜面に沿って階段状に展開する保育室は、林立する柱・筋交いと740mmの大きな段差によって緩やかに仕切られている。壁のない大きな空間は、園児の年齢を超えた交流・対応を可能にし、園全体をのびやかで活発な場に行している。

設備計画は極力エアコンを使わないことを目指し、冬は、大きな開口とトップライトで、太陽の恩恵を十分に受け、取り入れた暖気のサーキュレーションシステムを整備している。夏の通風計画は、南面と北面に風の出入り口を設け、建物の高低差を利用した重力換気により、南から呼び込まれた風は北側のテラスに抜ける。さらに、井水を屋根に流して冷却効果を期待すると同時に、流れ落ちる水を利用した池を遊び場にするなど、子どもたちの感性を育む独創的な配慮も楽しい。

(夏目 幸子)



保育園を「大きな家」と捉え、異年齢の子供たちが同じ空間を共有できる空間構成 (撮影/黒住 直臣)



敷地の特徴である南斜面を最大限活かした階段状の保育室 (撮影/黒住 直臣)

9

## 入賞

一般建築物の部

学び・憩い・集い・情報の場

# 八千代市立中央図書館・八千代市市民ギャラリー

市民の生涯学習の拠点施設で、「学び・憩い・集い・情報の場」をコンセプトに、新川の畔という立地から、河の流れを感じるような外観となっている。川面に広がる波紋を学習の広まりとイメージし、波紋の中心にあたる部分にフリースペースを配し、そこから、市民ギャラリー、中央図書館へと「学びの波」は、広げられている。中央図書館の利用者も市民ギャラリーの存在を認識し、相乗効果が高まるゾーニングとなっている。書架倒壊や本の散乱による避難パニックなど図書館の宿命的なリスクを回避し、安心して快適な空間を創造するため、免震構造が採用されている。ユニバーサルデザインを徹底させたワンフロアの施設は、天空光の採り入れや、太陽熱利用の温水熱源、地中熱を利用し負荷の低減を図る空調設備など、自然エネルギーを活用した省エネ・創エネにも取り組んでいる。開放的で誰もが親しみやすい空間づくりに努め、市民の文化芸術活動の発表・交流の場となる市民展示室や収蔵美術品を展示する常設展示室を備え、快適に長時間滞在できる複合施設となっている。

(圓崎 直之)



外観 新川側からの全景(新川とともに)



エントラスホール 図書館へのみちゆきに、フリースペース(左)とギャラリー(右)

建築主：社会福祉法人誠友会

設計：株式会社山崎健太郎デザインワークショップ

施工：株式会社東庄建商

所在地：佐倉市岩名961-2

建築主：八千代市

設計：株式会社岡田新一設計事務所

施工：前田建設工業株式会社 千葉営業所

所在地：八千代市村上2510

## 千葉県建築文化賞の実績(応募点数・受賞作品数)一覧

回数	年度	応募総数	建築文化賞			建築文化奨励賞
			部門		合計	
1~19回計 (H6~H24)		1,600	景観上優れた建築物の部		46	58
			ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部		26	
			環境に配慮した建築物の部		24	
20	H25	68	一般建築物の部		4	2
			住宅の部		2	
1~20回計		1,668			102	60

回数	年度	応募総数	部門別内訳	部門	建築文化賞			
					最優秀賞	優秀賞	入賞	合計
21	H26	52	32	一般建築物の部	1	2	3	6
			20	住宅の部	0	1	2	3
22	H27	54	33	一般建築物の部	1	3	2	6
			21	住宅の部	1	1	0	2
合計		106			3	7	7	17

- ※1 千葉県建築文化賞は、「景観上優れた建築物の部」及び「高齢者・障害者等に配慮した建築物の部」の2部門への表彰制度として平成6年度に創設。
- ※2 第3回(平成8年度)に「建築文化奨励賞」を新設。
- ※3 第5回(平成10年度)に「環境に配慮した建築物の部」部門を新設。
- ※4 第12回(平成17年度)に「高齢者・障害者等に配慮した建築物の部」から「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」へと部門の名称を改称。
- ※5 第20回(平成25年度)に「景観上優れた建築物の部」、「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」及び「環境に配慮した建築物の部」の3部門から「一般建築物の部」及び「住宅の部」の2部門へと部門を再編。
- ※6 第21回(平成26年度)より「建築文化賞」及び「建築文化奨励賞」から「最優秀賞」、「優秀賞」及び「入賞」へと賞の区分を再編。

第22回千葉県建築文化賞に御応募いただきました皆様へ厚く御礼申し上げます。応募総数54点の中から最優秀賞2点、優秀賞4点及び入賞2点の、合わせて8点が選定されましたが、応募作品はいずれも優れた特徴をもった質の高い作品でした。作品に携わられた皆様に敬意を表し、今後ますますの御活躍を期待しております。(千葉県建築文化賞検討会議事務局)

### 建築文化賞受賞作品

#### 所在市町村別の数

千葉市	28
習志野市	1
八千代市	3
市原市	5
市川市	5
船橋市	5
松戸市	5
野田市	4
柏市	3
流山市	3
鎌ケ谷市	1
浦安市	3
佐倉市	2
八街市	1
四街道市	2
印西市	6
白井市	1
栄町	1
成田市	2
富里市	1
香取市	6
山武市	2
東金市	3
大網白里市	1
大多喜町	3
いすみ市	2
鴨川市	4
南房総市	3
館山市	2
鋸南町	1
袖ケ浦市	1
木更津市	4
君津市	1
富津市	1
茂原市	1
酒々井町	1
勝浦市	1
計	119

### 受賞作品の位置



#### 第22回千葉県建築文化賞

##### <最優秀賞>

- ① 京葉銀行千葉みなと本部
- ② 鴨川の家

##### <優秀賞>

- ③ 勝浦市芸術文化交流センター  
(キュステ)
- ④ The University DINING
- ⑤ 流山市立おおたかの森小・中学校  
流山市立おおたかの森センター  
流山市立おおたかの森こども図書館
- ⑥ ちはら台の家

##### <入賞>

- ⑦ はくすい保育園
- ⑧ 八千代市立中央図書館  
八千代市市民ギャラリー

★は1~21回の建築文化賞受賞作品

## 選考の基準

次の事項を選考の基準とし、総合的に審査します。

- デザイン性に優れていること
- 安全で快適な建築空間を創出していること
- 防災への配慮がなされていること
- その他、独自の取組や提案がなされていること
- まちなみや周辺の景観と調和がとれていること
- 環境負荷の低減に配慮していること
- 施工上優れていること

※建築基準法等の諸法令に適合しており、かつ近隣等との紛争が生じていないことも求められます。

## 千葉県建築文化賞検討会議

委員長 北原 理雄：千葉大学名誉教授

委員 圓崎 直之：一般社団法人千葉県建築士会会長

副委員長 岩村 和夫：東京都市大学名誉教授

委員 岡部 明子：東京大学大学院教授

委員 夏目 幸子：建築家、NPO住まい・まち研究会理事長

委員 藤本 香：建築士、千葉大学非常勤講師

【敬称略 委員は五十音順】

千葉県建築文化賞は、多くの皆様の協力に支えられ、回を重ねてまいりました。  
その間、県下の広い地域にわたり、119の建築物が受賞され、  
それぞれの地域に根付いています。

第23回の作品応募は、平成28年夏頃行う予定です。

皆様方の御応募をお待ちしております。



千葉県  
マスコットキャラクター  
チーバくん

### お問い合わせ先

### 千葉県県土整備部都市整備局建築指導課

〒260-8667 千葉市中央区市場町1-1 TEL.043(223)3181 FAX.043(225)0913

### 一般社団法人 千葉県建築士会

〒260-0013 千葉市中央区中央4-8-5 TEL.043(202)2100 FAX.043(202)2101

### 後援

(公社)千葉県建築士事務所協会

(公社)日本建築家協会関東甲信越支部千葉地域会

(一社)日本建築構造技術者協会関東甲信越支部JSCA千葉

(一社)千葉県設備設計事務所協会

(一社)日本建築学会関東支部千葉支所